

## 他者との対話を通して生成される文化のナラティブ —文化・メディア・教育を通じた日常的行為へのアプローチ—

木戸 彩恵・家島 明彦・黒田 真由美・  
平川 祥子・東畑 開人

### 1. プロジェクトの目的と活動の概要（木戸 彩恵）

#### (1) プロジェクトの目的

我々をとりまく日常的行為の文化的文脈は、通常意識化されておらず、自らが在る文化圏から離れて違和感を覚えることによって、はじめて日常的行為に対する自分なりの意味づけが意識的・先鋭的に眼前に立ち現われてくる。例えば、自文化内において日常的に行っている化粧が、異文化においては全く異なる意味合いをもって受け取られることが、文化的越境を通して初めて行為者自身に認識されるような場合である（木戸、投稿中）。

このような違和感は、身近な他者との対話を通じた日々の行為が文化を生成しており、その文脈が、それぞれの文化において独自性を有していることに関わっている。そして、人が異なる文脈に身を置くときには、日常的行為の文化的独自性はアイデンティティ・ポリティクスのような文化間軋轢としてしばしば顕在化する。それぞれの文化的文脈における日常的な行為をありのままに理解するためには、個人の体験に纏わるマスター・ナラティブとその変容を、多様な文脈・視点から問い直す必要がある。

そこで、本コロキウムでは装い（化粧・美）・メディア（雑誌掲載広告）・娯楽（漫画）・教育（小学校の授業）といった日常的行為によって生成される文化に対して異なる文脈から多角的に検討する。装い・メディア・娯楽・教育は、いずれもが日常的に切り離すことができない行為であるがゆえに、複雑な構造を持っている。その性質は可変的であり、時代背景、所属する集団、文化によってとらえられ方や意味合いは多様である。行為主体である人の微細な文化化について考えること、個人のもつ文化の意味を考えていくことが文化を捉える際に重要なこととなり（矢吹、2004）、研究者は、そのダイナミズムについて精緻な検討をしていく必要がある。そのため、方法論としては、フィールドに密着した研究方法であるナラティブ・アプローチを採用したい。ナラティブ・ターンを機にナラティブ・アプローチは、多くの方法論が開発され実際の研究に使用されるこ

ととなった。

特に、ナラティブ・アプローチの中でも、対話的關係性の中で人々が日常的行為をいかに意味づけているのか、そのダイナミズムを臨床と発達という近接する領域から、相互の視点を通して領域横断的に検討する。そして、日常の文脈に埋め込まれた文化的行為が個人にとってどのような意味を有しているか、その微細な変容がいかに心理的に影響するか明らかにする。その上で、黒田（2005, 2006, 印刷中）が教室内での談話分析を通して教育へのサポート的介入を行っているように、ある行為に軋轢が生じた場合の支援の可能性について考察する。本コロキウムでは、対話の対象を人のみに限定せず、平川は雑誌、家島は漫画というように、様々な媒体を研究対象に含める。また、現段階においては、ナラティブ・アプローチに関する方法論の扱いの多くが、研究者個人の判断に委ねられている。

### （3）活動の概要

そのため、本コロキウムでは、①基礎研究としてナラティブ・アプローチにおける対話理論にまつわる文献の読書会をおこなった。具体的には、バフチンの理論がいかに実践的研究に結び付くか、実践的な研究をとおして学ぶことを目的として質的心理学研究（2008）の特集を精査した。その上で、対話理論に用いられている概念についての確認及び共通理解が必須であることを認識し、バフチンの代表作の一つである「小説の言葉」を読むこととした。基礎研究をとおして、それぞれが対話理論に関する基礎研究をふまえた上で、②応用研究として、実際にコロキウム参加者がおこなった研究を通して方法論の実用性を議論した。③さらに発展的に、新たなアプローチ法として、特に近年その役割が大きく注目されているヴィジュアル・ナラティブの可能性を吟味した。研究分担者それぞれの立場から、本コロキウムでの研究内容を報告する。

## 2. 基礎研究について

本コロキウムでは、基礎研究としてバフチンの理論を学びなおすことを目的に、3度にわたる読書会を開催した。

### （1）質的心理学研究第7号を読む（黒田 真由美）

【読書会の目的】 質的心理学研究第7号の読書会を振り返る。質的心理学研究に取り上げられている論文の中でも、バフチンの「対話」概念をさらに展開する論文や、バフチンの概念を援用し分析をすすめる論文を取り上げ、議論を行った。バフチンに関する知識を深めることとバフチンを今後の研究に活かすための視座を得ることを目指した。

本コロキウムでは、日常的行為によって生成される文化に対して異なる文脈から多角的に検討することを試みた。特に対話的關係性の中で人が日常的行為をいかに意味付け

ているのかを検討する上で、バフチンの提示している概念は有益であると想定された。というのも、バフチンの思想の根底には「対話」があり、よりリアリティのある「ことば」や「自己」についての議論がなされており、「ことば」と「話者」との関わりや、日常で用いられる「ことば」についての見解が提示されている。この考えについて理解を深めることは、バフチンへの理解を深めるだけではなく、文化や日常的行為について考えていくための一助になると思われた。

**【経過】** 読書会では、各論文に提示されているバフチンの理論について整理するだけではなく、各自の研究と結びつけながら議論を行った。ディスカッションでは、抽象的な議論に終始するのではなく、我々が研究対象とする日常的行為と結びつけながら活発な意見交換がなされた。バフチンの「対話」についての見解を各自が自分の研究と結びつけながら理解し、意見交換を通してそれを共有した。質的心理学の枠組みの中でバフチンの概念に関してはこれまでも議論してきたが、臨床心理学という専門分野の異なる参加者によって、バフチンに関する新たな見解がもたらされた。

**【得られた成果と今後の展望】** 読書会を通してバフチンの概念に触れることで、バフチンの難解さを改めて意識させられた。それとともに、個人では得られないような議論を展開するに至った。取り上げた論文はバフチンの概念を様々な知見と結びつけることによって展開されており、バフチンに関して学ぶだけではなく、多方面に意識を向け学ぶことの重要性を再認識した。

バフチンの概念に基づき分析が行われた論文の検討を通して、バフチンの理論が日常性をとらえなおしその能動性に注目する上で有効であることが示唆された。対話といっても、人と人との間でなされるものだけではなく、人とテキストを通して、ことばとことばとの間でなされるものも含んでおり、人が生きていく中で生じる関わりが対話として見なされており、日常的行為の新たな側面に意識が向けられた。やりとりのことばをバフチンの概念を用いて分析することは、文化的文脈をふまえながら日常的行為を問い直すことにつながった。そして、さらに、日々の行為の能動性に目を向け、そのダイナミクスをとらえることを可能にした。つまり、バフチンの概念を念頭に置くことは、学校や社会活動でみられる行為を、常に同じ意味を持つものとしてとらえるのではなく、その意味は変動するものとしてとらえることにつながる。さらに、日常的行為のダイナミクスを明らかにするための一助となるのである。そして、さらに、日常的行為に新たな意味を持たせることによって、方向付けることが可能である。バフチンの概念は、日常を改善するための一つの方向性を示唆してくれるのである。バフチンの概念をふまえた研究に関する議論は、バフチンに関する理解を深めるだけではなく、文化的文脈を前提とした日常的行為の研究にいかに関点を導入するのかという点に関して示唆に富んでいた。

また、この読書会で取り上げたバフチンの理論の根底にある対話とは、いかに研究を展開するかという観点で活かすことができるだけでなく、研究をする我々がテキストといかに関わるかという観点でも示唆を与えてくれた。我々がテキストと対話することによって、関心を向ける対象となっていなかったテキストからも、我々は影響を受け、新たな視点がもたらされる。バフチンの概念に触れることは、研究の展開だけではなく、それが先人から学び、知識を身につけ、自分なりに理解することの重要性を再認識するきっかけとなった。

文化手化的文脈を前提とした日常性に関心をもつ学生同士で、各専門分野を超えて議論ができたことは、定型化された考えを見直す為に有意義であった。質的研究の方法論として、日常的行為を見直し、方向付ける概念としてのバフチンの有効性がとらえられた。今後は、さらにバフチンへの理解を深めるとともに、バフチンの概念をふまえ、日常行為をいかに分析することができるのか考えていきたい。そして、文化的文脈に関する議論をさらに展開するために、新たな視座からさらに研究を進めた上で、さらに対話することが必要であろう。

## (2) 小説の言葉:「バフチン理論の基礎知識の学び—共同的学びの成果」(平川 祥子)

**【授業参加の目的】** 今回コロキアムの授業に参加した目的は、質的心理学会の学会誌、「質的心理学研究」の第7号でも特集が組まれるなど、質的心理学領域において注目を集めているミハイル・バフチンの理論について、学びを深めることである。先の読書会において、上述の、質的心理学研究の7号について読書会を行い、松嶋秀明(2008)の「境界線上で生じる実践としての協働—学校臨床への対話的アプローチ」を始め、データの分析においてバフチンの理論を援用した論文やバフチン理論について論じた論文について知識を深めた。そこで、それらの研究の土台となっているミハイル・バフチンの知見に直接触れ、先の読書会において学んだ知識と往還しながら双方をより深く理解するとともに、心理学研究へのバフチン理論の応用可能性について議論を深めることを目的として、今回の読書会を開催した。

考えてみれば、ことばは、様々な社会的、文化的な要因と絡み合いながら、その選択を潜り抜けて、言表として表出されるものである。そういったバフチンの視点を取り入れることは、新たな領域を開拓する可能性を秘めた魅力的な視点であるが、表面的な知識のみではそれらを具体的な研究に援用することは難しい。そのため、共同的な学びという、参加者個人の知識や経験と折り合わせ、それらを共有することができる場を設定し、活用することで、具体的な援用に方向づけながら、理論をより深く理解していくことを目的とした。バフチン理論を心理学研究へ応用する試みがまだ始まったばかりであるという点でも有益な試みであると考えられる。

**【経過】** 授業では、ミハイル・バフチンの“小説の言葉”についての文献講読を行っ

た。参加者5名が事前に各自文献を精読した上で授業に参加し、授業では、各自が自身の担当章について発表した後、文献の内容の検討及びトピックに関して、各自の知識や研究経験を織り交ぜながらディスカッションが行われた。

**【得られた成果と今後の展望】** “小説の言葉”の第2章“詩の言葉と小説の言葉”には、言葉の対話的定位の性質と、内的対話性について特に紙幅が裂かれ論じられていた。言葉の持つ対話的定位の性質とは、言葉は、対話的に自身の位置または姿勢を能動的に定めるものであるということである。バフチンによれば、あらゆる言葉は応答に向けられており、予期される応答の言葉と深い影響関係にある。言葉は応答を挑発し、それに向かって構成される。言葉は、既に語られた言葉の中で構成されながら、同時に、まだ語られていないが、要求されており、既に予期できる応答の言葉に規定されている。また、言葉と対象、言葉と語り手の人格との間には、同一の対象、同一のテーマに関する異なる他者の言葉の、弾力的でしばしば見通すことが困難な媒体が密かに介在しており、この特殊な媒体との相互作用を通じて、言葉の文体の個性化、形式化が可能になるというように、言葉は内的対話性を持ったものであるというバフチンの理論の基礎が詳細に述べられている。特に、“すべての言葉に職業、ジャンル、流派、当は、一定の作品、一定の人間、世代、年齢、個々の日付、時刻が感じられる。どの言葉と形式にも、志向が住み着いており、そこで言葉が自己の社会的に緊張した生活を営んでいるひとつの、あるいは複数のコンテクスト（ジャンル、流派、諸個人など）を感受できる”という言葉は、バフチンの理論を研究に援用する研究者にはもちろん重要であるが、それ以外でもことばを対象に研究を進めていこうとする研究者に要求される、ことばに対するセンシティブネスを表しているとも言え、非常に印象深い記述であった。

また、授業内では、概念の理解だけにとどまらず、バフチン理論をどのように研究に援用していくかについても積極的な議論が行われた。バフチンの理論を研究に援用している者、これから援用してみようとする者、これから学ぼうとする者、バフチン理論に対して異なる距離の者同士が積極的に議論することで、バフチン理論に対するより体系的な知識の地図を描くことができ、重要なエッセンスを学ぶことができた。また、具体的な研究との関連づけられながら議論されることで、バフチンの理論に関する幅広くまた深い理解に繋がり、私自身がこれまでに関心を寄せていなかった部分や知識や新しい発見に役立った。これは、大変参考になる役立つ知識であった。

朴・茂呂（2007）によれば、多いとは言えないものの、バフチンの対話性の概念は、既に複数の心理学領域において研究に移入が試みられており、この概念が心理研究に持つ意味を吟味されている。言説分析に基づく社会心理学では、対話性は記憶や帰属等の社会心理を拡張する鍵概念であったり、また、ナラティブに基づく臨床心理学的研究においても対話性による自己概念の改鑄が試みられていたり、特に言葉を対象とした心理学領域では注目が集まっている。この点からも今年度のコロキウムで得られた基礎的

な知識を発展させ、継続的に学習をおこないたい。

### 3. 応用研究：個人研究「心理臨床における美の問題」の発表（東畑 開人）

#### （1）授業参加の目的

発達教育学の院生と共に、一年間を通してコロキウムを行ってきた。基本的にはデータと向き合う姿勢などについて、議論を深めてきたわけだが、一度自分の研究をまとめて発表し、それがどのように受け取られるのか、そしてそこからどのような知を得ることが出来るのかということに関心が向かった。

今までに行ってきた研究を年代順に振り返り、巨視的な立場から、自らの研究がどちらの方向に向かっているのかを確認できたと考えていた。実際、そのような自分を振り返る機会としては、発達教育学の院生というのはまたとない聞き手であるように思われた。特に、化粧文化などの美との関連領域を研究する院生がコロキウムには所属しており、自らの視点がいかなる偏りをもっているのかを直接的にフィードバックすることが可能であるという意味で、学際的な場における自らの研究の発表は極めて有意義なものになると考えられた。

まずは発表内容を簡潔に紹介し、その上でディスカッションを通して、得られた内容について検討を行いたい。

#### （2）経過

筆者の研究についての発表を行った。卒業論文での「美的感情の構造について」から始まり、直近の「Relationship between Narcissism and Aesthetic Experience」まで研究の流れを振り返った。

そもそも、「人によって美醜の感じ方が異なるのはなぜか？」という問いを立てて始められた研究であったが、抽象的な問いから、具体的に身体・容姿の問題を扱い、芸術療法における美の問題、箱庭療法における玩具の美、そして面接関係における美的な感じ方と様々な観点から研究が行われた。その中で、美的対象についての研究から焦点は主体の側へと移っていった。すなわち、事物や自己を美的な次元で眺める主体とはいかなるありようをなしているのか、へと問題の焦点が移っていった。研究の方法としても、当初は調査研究の手法が多く使われたのであるが、その後は臨床実践での体験をもとにして、文献を用いながら当該のテーマの探求を行うようになっていった。

このような研究の流れに加えて、心理臨床学における研究の位置づけに関しても発表を行った。すなわち、科学的な知に研究の関心を集中するのではなく、臨床の知という科学とは異なるモードの知のありようを視野に入れて行われる研究について発表を行った。具体的には「X とはなにか？」という問いは、「X を通して人間とはいかなる存在であるのか？」という問いを背景に持って、そして第1の人間としての「私」に焦点化

して「Xとは何か、と問う私とはだれか？」という問いのありようを、心理臨床学の研究は持たざるを得ないということについて発表を行った。

以上、簡潔に発表内容を記したが、その上で実際のコロキウムではいかなる議論がなされたのかについていかに記述する。

### （３）得られた成果と今後の展望

何より印象的であったのは、美というものに対する参加者と発表者との意見のずれであった。「美」という言葉が、各人に異なった連想を呼び、そのことによって收拾のつかない混乱を引き起こしたのが印象的であった。これは研究の枠組みとして、「美」というテーマがいまだ共通言語化されていないことに起因していると考えられた。

一方で、発達教育学の中では基礎文献とされる美に関する研究について教示を受けたことは大きな幸いであった。実際に、その文献をコロキウム後に読んでみて、今までの自らの枠組みとは異なるものであったゆえに、大きな学びとなった。他の研究領域との学際的な活動は、研究者の視点を拡張し、テーマを多角的に理解していく上で非常に大きな意義があることが実感された。

研究方法についても議論がなされたが、論理性というものに対する尊重は共有された価値観であることが実感された。具体的な研究法がいかなるものであるにせよ、問いを立て、それに答えていく作業が論理的になされることが、専門分野を超えて、知を共有し、練磨していく上で、欠くことのできない倫理であることが強く実感され、今後の課題としていければと考えた。

### （４）まとめ

以上、簡潔に本年度のコロキウムにおける筆者の発表についてまとめた。研究発表は大きな学びになるものであった。それは研究自体の進展に資するものであり、同時に他分野と協調して知を深めていくという作業がいかなるものかという研究者としての倫理の上でも大きな学びであったと言える。その意味では、自らの研究発表だけではなく、本年度のコロキウムの活動は、一年を通して大きな学びをもたらしてくれるものであった。最後に、本年度の活動を振り返って、まとめとしたい。

バフチンの読書会から始まり、後半はメンバーとのディスカッションに焦点をおいて進められた本年度のコロキウムでは、まさにデータに対する姿勢というものが大きなテーマとなっていた。データとは研究を進める上で基盤となるものであり、その意味で専門領域を超えて、関心をもたれるテーマであった。

このようなテーマは筆者の関心にひきつけるならば、心理臨床におけるデータとは何か、そしてそのデータと向き合う主観とはいったいいかなるありようで可能かという問題であった。特に、逆転移というクライエントとの関係をも関心事とする心理臨床においては、データと、データと関わる主観とが不可分なものとなっている。発達心理学領

域でも、ナラティブには主観の関与が必要とされているが、心理臨床の視点とは主観の生々しさの点に関してやや異同があるように思われた。他者なる学問に触れることで、自らの学問を創造的に反省することが出来たのが、今年度のコロキウムに参加して一番大きな収穫であった。

#### 4. ヴィジュアル・ナラティブという可能性（家島 明彦）

本コロキウムでは、文化とナラティブについて多角的に検討し、議論を重ねてきた。改めて「ナラティブ」というものについて考えて見ることで、ナラティブの多様なあり方が明らかとなった。特に、ナラティブが「語り」と訳される場合は文字通り「語る行為／語られたこと」といった口述（Oral）のナラティブになることが多いが、「物語」と訳される場合は言葉だけではなく映像で紡ぐナラティブの可能性が考えられる。本節では視覚的（Visual）なナラティブとは何か、また、ワークショップを通じてヴィジュアル・ナラティブとは何かについて検討した結果を報告する。

##### （1）ヴィジュアル・ナラティブとは

イメージを用いたナラティブ研究については、これまでも研究がおこなわれてきている。欧米では Visual Narrative という言葉が近年注目を浴びており、ナラティブ・ターンの次はヴィジュアル・ターンがやってくると主張する研究者もいるという。実際、『Graphic Storytelling and Visual Narrative』や『Image & Narrative』といったタイトルの本やオンライン雑誌が登場しており<sup>(1)</sup>、ヴィジュアル・ナラトロジー（visual narratology）なる研究領域の開拓も進められている。ほとんどのナラティブは言葉の人工物（Verbal Artifacts）であるが、ナラティブの形態・次元は多様である（Ryan, 2003, p333-335）。ナラティブ研究の最前線においては、これまでの言葉のナラティブから、画像・映像のナラティブにも焦点が当てられるようになってきていると言えるであろう。国内でも何人かの研究者がヴィジュアルなナラティブに着目して研究をおこなっている。例えば、京都大学のやまだようこ教授は「視覚的ナラティブ言語」としてのイメージ画や図像や映画などの可能性を検討している。また、ヴィジュアル・ナラティブを含めてナラティブが文化と深いかわりを持つことから、ナラティブと文化の関連を多文化横断的に検討することを目指した研究プロジェクトも展開している<sup>(2)</sup>。本コロキウムのメンバーの中にもマンガや美容広告といったヴィジュアルなナラティブを扱う者がおり、ナラティブ研究の中でヴィジュアルなナラティブを扱う研究は今後ますます増えてくると予想される。

そのようなヴィジュアル・ナラティブへの関心の高まりを背景として、京都大学では映像ナラティブ・ワークショップが開催された。次節では、その映像ナラティブ・ワークショップにコロキウムのメンバーが参加して学んだことについて報告する。

## (2) 映像ナラティヴ・ワークショップ (第1回)

【授業参加の目的】 この映像ナラティヴ・ワークショップは、コロキウム・メンバーの一人である家島が3ヶ月半シカゴに研究留学した際に世話になった人物である高橋正実氏（ノースイースタン・イリノイ大学 Associate Professor）による3部構成のワークショップであった<sup>(3)</sup>。

【経過】 第一部「沖縄長寿ドキュメンタリー：質的研究としての製作過程」では、研究とドキュメンタリーの比較がなされ、主に製作過程における異同が解説された。第二部「映像コンテの発想」では、参加者が実際にビデオカメラを使って映像ナラティヴを収集・作成し、ピア・レビューをおこなった。第三部「元予科練生の回想」では、高橋氏が作成した映画『Last Kamikaze』の鑑賞を通して議論がおこなわれた。

【得られた成果と今後の展望】 高橋氏のドキュメンタリー映画は、アメリカ心理学会やアメリカ人類学会で招待講演（上映）されたり、アメリカのラジオで紹介されたりするなど、広く高い評価を得ており、映像ナラティヴが質的研究のアウトプットの一つの形として有効であることを学ぶと同時に、ナラティヴ研究のフィードバック（研究成果の社会還元）についても考えさせられることが多かった。グループ実習において生成されたショート・ムービーも映像ナラティヴであり、本コロキウムのテーマである「他者との対話を通して生成される文化のナラティヴ」の一つの形であることを体感し、また同時に、出来上がった映像ナラティヴの上に様々な語り（ナラティヴ）が重ねられていくというナラティヴの多層化・重層化についても学んだ。映像ナラティヴ・ワークショップを通して、ヴィジュアル・ナラティヴについての理解を深め、ナラティヴを扱う研究者として大きく成長することができた。特に、ナラティヴ研究の幅、可能性が広がった。

## 注

- (1) 前者は2005年に亡くなったニューヨーク生まれの漫画家・企業家であるウィル・アイズナーの著作（2008年8月に出版）であり、後者はヴィジュアル・ナラティヴに関するオンライン雑誌（Image [&] Narrative: Online Magazine of the Visual Narrative - ISSN 1780-678X <http://www.imageandnarrative.be/>）である。
- (2) 科学研究費プロジェクト 基盤研究 (A) 「多文化横断ナラティヴ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」（課題番号：20252009, 代表者：山田洋子）  
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/develop/kaken/index.html>
- (3) 京都大学グローバルCOE 「心が活きる教育のための国際拠点」 ユニットC プロジェクト「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」 主催、科学研究費プロジェクト「多文化横断ナラティヴ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発」 共催のワークショップ（2008年6月25日 於 京都大学芝

蘭会館研修室)であった。後に、同じ主催・共催で、2人の若手人類学者を登壇者とする映像ナラティブ・ワークショップ第2回(2008年11月5日 於 京都大学芝蘭会館研修室)も開催された。

#### 引用文献

M. L. Ryan. (2003). Narrative Cartography: Toward a Visual Narratology. In T. Kindt & H. H. Müller (Eds), *What Is Narratology? Questions and Answers Regarding the Status of a Theory*. Berlin: De Gruyter. pp. 333-364.